

## はじめに

根岸 雅史 (東京外国語大学 教授)  
海野 多枝 (東京外国語大学 助教授)  
吉富 朝子 (東京外国語大学 助教授)

本書は、「21世紀 COE プログラム言語運用を基盤とした言語情報学拠点」を構成する言語教育学班(第二言語習得研究班と評価班)の2005年度の研究成果、及び、『TUFSS 言語モジュール』の学習者ガイドを収めている。

第二言語習得研究班では、大きく2つのタイプの研究が進められてきた。ひとつは、第二言語習得理論に基づいたアプローチの模索である。もうひとつは、学習者コーパスの分析や指導法の効果の検証といった実証的な研究である。前者の理論的な研究と後者の実証的な研究とは補完的な関係にあり、お互いに関連付けられることによって、言語教育学研究が進み、ひいては、言語教育の成果が上がっていくものと思われる。

評価班では、言語能力記述のヨーロッパの代表的枠組みである Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) の日本人外国語学習者への適用可能性を高める方策を実証的に探ってきた。本年度は、これまでの研究成果をもとに、さらに実証的な研究を実施した。その一方では、TUFSS 言語モジュールの中の会話モジュールを CEFR と関連づけることも試みている。CEFR への関連づけが試みられたのは、具体的には、日本語・韓国語・中国語・フランス語・英語の会話モジュールにおけるキーセンテンスである。さらに、CEFR に関連して、従来の4技能評価の問題点を整理し、そこからの脱却の方向性を提示している。

本書では、上述の成果を、第二言語習得研究と言語教育、評価モデル、資料編の3つに分けて掲載する。以下、各セクションの詳細について述べる。

### I 第二言語習得研究と言語教育

ここでは、第二言語習得研究と言語教育に関する3つの論文が収められている。

「コミュニケーション能力モデルに基づく英語教育：第二言語習得理論を反映したアプローチの提言」(吉富)は、コミュニケーション能力を育成する効果的な指導法を実践するには、第二言語習得(SLA)研究を踏まえた外国語教育アプローチの採用が必要である、との前提に立ち、理論と実践の橋渡しを試みている。SLA 研究において提唱されているいくつかのコミュニケーション能力モデルを考慮することで、コミュニケーション能力の育成に望まれるアプローチについてのさまざまな示唆が得られることを、SLA 理論の他、談話分析・中間言語用語論・コーパス言語学などの関連分野の成果も踏まえて論じた。

次の「学習者言語コーパスに基づいた教材開発の可能性—日本語コロケーション習得を目的とした教材開発の試み—」(鈴木・海野)は、21世紀 COE 「言語運用を基盤とする言

語情報学拠点」プロジェクトの成果物として作成した『上級学習者の日本語作文コーパス』を用いた誤用分析の結果をふまえ、日本語コロケーション習得を目的とした教材開発を試みた。本稿ではその試みを通して、学習者言語コーパスに基づいた外国語教育教材開発の可能性について論じている。

3つめの“Utilization of a Local Dialect and a Task Activity: Making the Best Use of the Focus on “Form” and “Forms” Approaches” (Imai and Takashima) では、日本のような外国語教育環境で、コミュニケーション能力を伸ばすような指導を行うためには、focus on forms と focus on form という一見相反すると思われるアプローチをうまく組み合わせることが効果的であると論じている。方言を活用することで現在完了形と過去形の区別を明示的に教え (i.e. focus on forms), タスク活動を通して言語運用を経験させる (i.e. focus on form) ことによって、学習者の第二言語習得が促進されることを検証した研究である。

## II 評価モデル

ここには、評価班の研究成果として7つの論文が掲載されている。まず、「CEFR の日本人外国語学習者への適用可能性の向上に向けて」(根岸) では、CEFR の日本人外国語学習者への適用可能性を探っている。CEFR をもとにした Can-do アンケートを実施し、その項目難易度順が CEFR のレベルと適合しているかを見ている。本稿では、先行研究で適用に問題があったとされる項目に実例を附すことで精度の向上を試みている。分析の結果、実例を附すことで多くの項目の精度は向上したが、リスニングの項目は、実例をスクリーンショットで示したために、改善されなかった。

以下の6つの論文は、TUFSS 言語モジュールにおける会話モジュールと CEFR との関連づけを試みている。会話モジュールは、現在はどこからでも始められるようになっているが、学習者の利便性を考えると、何らかのレベル分けを行うことは意味があると考えられる。そこで、それぞれの会話モジュールにおけるキーセンテンスを CEFR に関連付けようとしている。取り上げた会話モジュールは、日本語・韓国語・中国語・フランス語・英語である。「TUFSS 言語モジュールにおける会話モジュールと CEFR の関連づけの試み」(根岸) では、今回の試みの意義と目的を概説している。それぞれの言語における関連づけの論文は、「日本語会話モジュールと CEFR の関連づけの試み」(井之川), 「韓国語会話モジュールと CEFR の関連づけの試み」(藤原), 「中国語会話モジュールと CEFR の関連づけの試み」(曲), 「フランス語会話モジュールと CEFR の関連づけの試み」(杉山), 「英語会話モジュールと CEFR の関連づけの試み」(工藤) である。

また、「4 技能評価に関する諸問題」(山森) では、従来の外国語評価で用いられてきた4技能の枠組みを概観し、その問題点を指摘している。その上で、今後の外国語評価のための方向性を考え、CEFR を新たな言語能力評価の枠組みとしてとらえ直そうとしている。

### Ⅲ 資料編

「TUFUS 日本語会話モジュール学習者ガイド」(海野他)は、『TUFUS 日本語会話モジュール』を用いて学ぶ学習者用の補助教材である。内容は1)『TUFUS 日本語会話モジュール』について(構成, 登場人物, 場面等についての情報), 2) 学び方のヒント(『TUFUS 日本語会話モジュール』と本ガイドを用いて効果的に学ぶためのヒントやモデルコースの提示), 3) 各ユニットの解説(『TUFUS 日本語会話モジュール』の各ユニットにある重要表現, その他の重要表現, 文化と生活, 機能一覧など)が含まれている。

本書に収められた研究成果が, 言語教育学・第二言語習得研究のさらなる発展に寄与することを願う。最後に, 体裁面の編集は, 東京外国語大学大学院博士後期課程の井之川睦美, 杉山香織, 藤原愛が担当したことを付記しておく。

2006年 8月